

上田市立第一中学校

国語科 3 学年

単元名「作家の時間」

授業者 富樫 壮

指導者 堀内 陽子（東信教育事務所指導主事）

1 本時の主眼

これまでの学びを振り返りながらお互いの文章のよさや改善点を見つける場面で、これまでのミニ・レッスンで確認した見方や考え方を活用して改善してきた経験を踏まえて、困っていることや友の文章を読んで考えたことを話すことを通して、自分が働かせている見方・考え方の傾向や自分の文章の構成・表現のよさや改善点に気付くことができる。

2 視聴覚機器の役割

機器	Chromebook (Google ドキュメント)
場面	① 文章の作成 ② 校正場面における友との意見交換 Google ドキュメントで作成した文章をグループの仲間と共有し、コメント機能を用いて編集会議を行う。
効果	校正場面においてコメント機能を活用することで、友からもらったコメントに対してどのように考えたのかを自分のコメントとして残し、記録に残すことで、生徒が文章を修正するときに「どのような見方・考え方を働かせているか」を捉えられるようにする。

3 授業の概要

本単元ではライティング・ワークショップをベースに、文章のジャンルや題材、内容、想定される読者の決定に始まり、書くペースも生徒に委ねて、生徒一人ひとりがオリジナルの作品を執筆する授業を構想した。本時案では各自の作品を校正する編集会議を構想していたが、生徒の執筆状況から、本時も執筆活動を行うこととした。

導入場面では、前時の生徒の振り返りから執筆中の悩みや友に意見を聞いて決めたいという考えを紹介し、「友達の考え方や意見も参考にしながら、文章を書こう。」という学習課題を据えた。生徒は図書センターの好きな場所で、近くの人と（もしくは一人で）、執筆を行った。また生徒たちは、紙のアイデアシートにイラストやマインドマップで構想を練ったり、図書館司書と相談しながら必要な資料を探したり、前時の振り返りカードに記入した自分の構想を参考にしたりと、自分に必要な手段を選択し活用しながら執筆していった。

A生は「味覚」という言葉の定義が曖昧で文章がつかないという悩み、教師が全体指導で紹介したGoogle ドキュメントのコメント機能で、友に質問をした。す

るとB生がA生の文章を共有し、一緒に検討を始めた。B生が関わったことで、A生は違う見方・考え方を働かせ、文章の構成を検討することができていた。



4 研究会の要点

- ・自分の「書きたい」という勢いを大切に書く上で、従来の原稿用紙ではなく Chromebook を用いたことは有効であった。
- ・オンラインで友に助けを求めて、オフラインでも交流ができるというのが、今回の生徒たちには有効に働いていた。このオンとオフのバランスをどうしていくかが、これからの検討事項になる。
- ・文章の構成に悩み、執筆が進まなかった生徒には、Chromebook を使っているので、一度書いてみて、後から構成を考えるように促してもよかった。
- ・前時までのクラス全員の進捗状況を生徒同士が確認できるような手だてがあれば、さらに自身が困っていることを解消したり、より自信をもって執筆を続けたりする姿につながるのではないだろうか。

5 指導者の助言

指導案では、自分の文章を友と共有し、読み手の視点を得ることで、よい点や改善点を考え、どのような見方・考え方を働かせればよいか、気付くことができるようにしていた。また、言葉による見方・考え方を働かせながら考えを形成したり問題を見いだして解決策を考えたりするなど、深い学びにつながる単元を構想したところも大切な点である。

本時では、「生徒自身が学習の見通しをもつ」「自らの学習を調整する」「自分の学びを振り返る」という活動が、ICT 機器を活用することでより効率よく行っていた。また教師の手立てとして、「無自覚な視点を位置付ける」「自己課題に対峙する時間を確保する」ことがなされていたことも、学ぶべき点である。

ICT 機器の活用にあたっては、育成を目指す資質・能力との関連を明確にし、効果的に活用しながら、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりをすることが大切である。このような学びの場を設定することは教師にも根気がいるが、その蓄積によって、本時の生徒の姿のような主体的な学びを実現することにつながるだろう。

6 今後の課題

ICT 機器を使うことが当たり前になりつつある今日こそ、改めて「何を目的として使うのか。その活用によってつきたい力は何なのか。」を明確にして、授業づくりをしていくことが必要である。教科の垣根を越え、様々な場面での活用方法を全校で模索していきたい。